



読売 俳壇

矢島 渚男 選

クロールの息つき習ふ青畳

茅ヶ崎市 原田 博之

【評】水泳の難関の息継ぎ。私もや
ったことがある。どつち首を上げ
るかは遺伝か。絨毯よりも青畳の
上が練習にはいい。海の気分が出る。
博物館の網走監獄未草

札幌市 藤林 正則

【評】明治の監獄則で設置され今は博
物館。北海道の囚人は厳しい監視下
道路鉄道の工事や鉱山労働に従事。
外に出るとスインが咲いていた。
重厚な内容が優しい花で救われる。
風鈴の鳴っているかと問う父よ

堺市 原山 桂子

【評】風鈴の音色は酷暑の中でも鳴
っている。耳が悪くなった父には聞
こえない。あれは鳴っているかとい
作者は聞かれた。異色な風鈴の句。
沖縄忌また戦いの準備して

葛城市 二上 三六

取調室の天井扇風機

大阪市 今井 文雄

でむししの絶滅危懼種とや哀し

つば市 坪 文雄

義肢と見て鴉動かず夏木立

鎌倉市 中江 優子

駒草や頬擦り寄せる柵の馬

仙台市 斉藤 栄子

手話の児に友二人で夏休み

飯田市 井原 修

夏の日の暮れててはか老いるなり

姫路市 菊亭 典夫

宇多喜代子 選

午後六時西日まことの夕餉かな

武蔵野市 相坂 康

【評】作者のお宅では、午後六時が
夕食の時間と決まっているのだら
う。冬であれば真つ暗だが、夏の六
時はまだ明るい。そんな夕餉の風景
が微笑ましく見えてくる。
ステテコでビール飲む父遠くなり

埼玉県 中田やす子

【評】当節では見ることの少なくな
った懐かしい父親像である。勤めを
終えたお父さんのささやかな喜びの
情景に親しみがわく。
お隣りも老の二人や豆の飯

姫路市 戎子 千賀

【評】作者も老いの二人お隣りも老
いの二人。当節では珍しくない老人
の二人暮らしだがそれでも豆飯がい
ささやかな幸せを感じさせられる。
簾してきのふの遠くありけり

千葉市 中村 重雄

海の声山の声沸く夏帽子

東京都 高根沢啓子

リヤカーに町の子乗せて麦の秋

霧島市 久野 茂樹

早曉のみち豌豆の雲かな

鈴鹿市 岩口 巳年

身の疎むきのふけふなり髪洗ふ

仙台市 松岡 三男

濁流のうねる点景半夏生

さいたま市 西村 正男

風鈴に幸せよとて風が吹く

福原市 城 恵三子

正木ゆう子 選

子鴉は「あー」と濁って仲間入り

札幌市 田口 和子

【評】濁点「一」が入るのは普通カ
・サ・タ・ハの行だけだが、この
「あー」にはみな肯くののではないだ
らうか。音声にこだわった前半から
生態にうまく転じた下五が可愛い。
しやぼん玉地球も虹の色なすや

福岡市 高山 国光

【評】地球の表面も水に覆われてい
るから、しやぼん玉のように虹色に
見えるかも、とは私も思う。何処か
ら、誰が見るのかはわからないが。
国生みの島に夕虹あすは晴れ

神戸市 大浜 義弘

【評】古事記の「国生み神話」で、
イザナギ・イザナミが最初に生んだ
島は淡路島。その島の夕景が見られ
るとは。しかも虹まで架かって。
夏雲やわが瘦せ腕の力こぶ

伊勢原市 吉田 吉宣

時かけて青大将の去りゆけり

神戸市 藤生不二男

盛り場の午後の素顔へ水を打つ

徳島市 長山 敦彦

偏食もありて長命アロハシャツ

旭市 神成田佳子

いつまでも親は居ないぞ鳥の子

土浦市 今泉 準一

那須岳の煙も収め雲の峰

須賀川市 関根 邦洋

土用干絵本に残る子等の声

茅ヶ崎市 清水 吞舟

小澤 實 選

理非正否混沌の世や草茂る

海老名市 山田 山人

【評】地球温暖化ひとつとっても
その理非、正否をどう考えて、どう
向き合ったらいいのか。わかりにく
い、そんな問題ばかりだ。悩みつつ
も、現代と対している一句。
汗滲む警備日誌の署名かな

志木市 谷村 康志

【評】警備日誌は担当者が交代する
際に記載し、次の担当に引き継ぐ。
その署名に汗が滲んでいるとは、暑
く、厳しい労働条件のようだ。
もちまきも余興のひとつ海開き

対馬市 神宮 斉之

【評】海開きは海水浴場を始める日
である。餅を撒いて景気つけるとい
うのは、ひなびていていい。砂浜に
撒き、こどもたちが拾うのか。
売り尽しATMへ夜店入

名古屋市 可知 豊親

白シャツやフオークをすべるチポリタ

神戸市 西 和代

素謡の声を合はせる夏座敷

東京都 腰山 正久

大嫂隠れて隠れきれぬひし

日高市 佐藤 隆夫

広召の兄の無念や広島豆

島根県 重親 映人

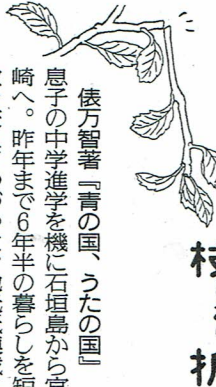
青空や重機も土砂も灼けぬたり

国分寺市 野々村澄夫

朝採りの胡瓜を揉んで恙無し

行橋市 野田 文字

枝しおり 折



徳万智著『青の国、うたの国』

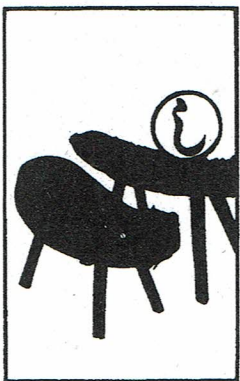
息子の中学進学を機に石垣島から宮
崎へ。昨年まで6年半の暮らした短
歌を交えてつづった、地元紙連載エ
ッセーをまとめた。多彩な交流にお
いしい食べ物。牧水を生んだ短歌集
の豊かさを伝え、住んでみたくなる。
△子ごもらのそばに短歌があること
の陽さしの恵み、海からの風▽
(ハモニカブックス、1870円)

◆第4回塚本邦雄賞 大森静佳

『ヘクター』(文芸春秋)

◇

*注意ください
最近、当欄や他紙の掲載作を含む
他者の先行作や、過去に入選した自
作などに多少の変更を加えただけの
類似作品の投稿が散見されます。投
稿規定にある通り、二重投稿や盗作
は厳禁で、作品はオリジナルに限り
ます。ご自身や他者の過去作品と重
複がないか、くれぐれも確認のうえ
ご投稿ください。



題字デザイン・イラスト 福田美蘭